

平成 28 年 6 月 15 日現在

機関番号：17701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770239

研究課題名(和文) 近世薩摩藩における奥向構造の復元的基礎研究

研究課題名(英文) Restoration basis research of "Okumuki" structure in Early Modern Satsuma feudal clan

研究代表者

佐藤 宏之 (SATOU, HIROYUKI)

鹿児島大学・法文教育学域教育学系・准教授

研究者番号：50599339

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、薩摩藩における同時代の、異なる人物の手元で作成された複数の奥日記を分析対象とすることで、奥向構造の人的・組織的・史的な全体像を把握・復元することを目的とした。

12人の手による38冊の日記を分析し、儀礼・贈答から血縁者の交流関係をあきらかにすることができた。また、藩政に関わる史料が書き写されていたことから、奥向自体が独立した組織ではなく、表向と相互に補完し合う「政治機構」として機能していたことがあきらかとなった。

研究成果の概要(英文)：In this study, of the same period in the Satsuma feudal clan, that to be analyzed multiple diaries that have been created in the hands of different people, to understand and restore the human and organizational and historical specific overall picture of "Okumuki" structure aimed.

To analyze the 38 books of the diary by 12 people of the hand, it was able to clear the exchange relationship of relatives from the ritual-gift. In addition, from the fact that historical materials related to the clan had been transcribed, rather than the organization that "Okumuki" itself became independent, it was functioning as a "political mechanism" that complement each other in the table direction and mutual became clear.

研究分野：日本近世史

キーワード：薩摩藩 島津家 奥向

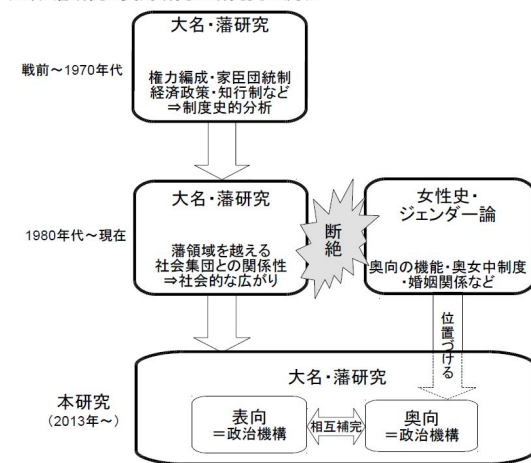
## 1. 研究開始当初の背景

江戸時代の大名・藩に関する研究は古くから存在し、藩の制度史的研究からはじまり、藩領域を越える社会諸集団との関係性、今では藩の社会的な広がり注目が集まるようになった。

一方、総じて受動的であり、歴史の表舞台に立つ存在ではないと考えられていた女性を歴史の主体として取り上げる女性史・ジェンダー論が脚光を浴び、奥向の機能や奥女中制度、婚姻関係などの研究が進展し始めている。

大名・藩研究と女性史・ジェンダー論は双方に広がりをもちながら、しかし必ずしも相互に関連づけて論じられているとは言い難い状況にある(下図参照)。

大名・藩研究と奥向研究の研究史の流れ



申請者は、これまで津山藩松平家8代藩主松平斉民(11代将軍徳川家斉の子)が江戸城大奥の老女瀬山や実母、幕閣、諸大名を頼って加増運動を展開していたことを明らかにしてきた(佐藤宏之『近世大名の権力編成と家意識』吉川弘文館、2010年)。このことは、当時の大名が、「御家」存続を図るひとつの手段として、奥向が表向(政治の場)と密接に関わっていると認識していたことを示すものである。

したがって、これまでのように奥向を独立した存在として扱うのではなく、表向と対等に扱い、それぞれが相互に補完し合う「政治機構」として改めて位置づけ直す必要があると考えた。

近年、『歴史評論』(「奥」からみる近世武家社会、2012年7月号)で特集が組まれるなど、近世武家社会の奥向についてやジェンダーについての関心が高まっている。薩摩藩においても2008年のNHK大河ドラマ「天璋院篤姫」をきっかけに、「薩摩藩奥女中文書」(東京大学史料編纂所)や「萩島家文書(薩摩藩奥女中関係)」(八王子市郷土資料館)などの新たな史料が発見され、それに基づく研究成果も現れ始めた(畑尚子

『徳川政権下の大奥と奥女中』岩波書店、2009年)。

ところが、島津家奥日記に関して研究動向を探ってみると、約40年前にその存在はすでに指摘されていたにもかかわらず(『東京大学史料編纂所報』第7号、1973年)、これまでの先行研究において全く活用されてこなかったのである。「篤姫」ブームもあってか、近年になってようやく、崎山健文氏(鹿児島県歴史資料センター黎明館学芸員)が「嘉永六年表方御右筆日記」を、岩川拓夫氏(日置市教育委員会)が天保2～5、13年の「磯御滞在日記」を翻刻・紹介しているが、奥向の全体像を把握・構成するまでには至っていない。

また、松崎瑠美「大名家の正室の役割と奥向の儀礼 近世後期の薩摩藩島津家を事例として」(『歴史評論』747号、2012年)があるが、用いている史料は『旧記録』といった編纂物が主であり、当事者の記録にまで分析が及んでいない。

本研究は、こうした研究状況を打破する意味もある。

各藩の奥向は千差万別で、基本史料となる奥日記も大部であり、各地で発掘され一部活字化されてはいるもののまだまだ活字化されていない部分も多く十分に活用できる状況ではない。

したがって、本研究は、奥向の人的・組織的・史料的な側面から全体像を構成するためには、同時代の異なる人物の手元で作成された史料を分析することが重要であると考え、その基礎的な研究を一気に推し進めようとするものである。

この基礎的な研究のうえにたって、大名家の政治文化構造や秩序維持システムを明らかにしてきた儀礼・交際研究や、「御家」の継承意識や存続戦略の研究と接合し、奥向を単に女性が閉ざされた空間としてとらえるのではなく、政治機構のひとつとして位置づけるものである。

本研究によって奥日記の活用例を示すことが期待される。今後、よりいっそう史料復元的な研究を推進することで、各藩の奥向構造の比較検討、総合化を目指す足がかりをつかみたい。

## 2. 研究の目的

本研究は、近世薩摩藩における奥向構造をあきらかにするために、尚古集成館所蔵の島津家奥日記を用いて、近世薩摩藩における奥向構造を人的・組織的・史料的に把握・復元し、それを表向(政治の場)と相互に補完し合う「政治機構」として、藩政に果たした役割を大名・藩研究のなかに位置づけることで、各藩の奥向構造の比較検討、総合化を行ううえで基盤となる研究を行う。

そのために、以下の具体的な目的を設定する(次頁の図を参照)。

奥日記の撮影・翻刻と奥向構造の復元  
 尚古集成館が所蔵する島津家奥日記は、江戸時代期に限定しても146冊（明治以降を合わせると283冊になる）存在する。

なかには1年分で500丁を超える大部なものも存在する。

その内容は、藩主を中心に鹿児島城本丸の様子を記した「表方祐筆間日記」、藩主の鹿児島城以外での様子を記した「滞在日記」、藩主の家族で特定の人物を中心に記した「御印日記」となる。

島津家関係人物の御印一覧

齊興	第10代藩主	玉印
由羅	齊興側室	鳶印
久光		亀印
村(武良)	久光側室	萩印
典姫	齊彬四女、島津珍彦室	宝印
寧姫	齊彬五女、島津忠義継室	楨印、万喜印、万亀印
哲丸	齊彬六男	獅子印
暲姫	齊彬三女、島津忠義正室	弓印
お八百	垂水島津家島津貞敦の正室。 南部信順(島津重豪14男)の娘	鍵印

そこで本研究では、膨大にある日記をすべて用いるのではなく、同時代の、異なる人物の手元で作成された奥日記を用いて、奥向構造の人的・組織的・史的な全体像を把握・復元することにしたい。

儀礼・交際研究、「御家」存続の研究との接合

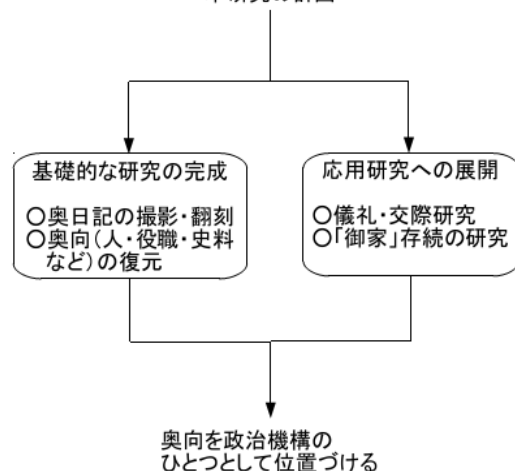
近年、儀礼の分析による政治文化構造や秩序維持システムを解明する研究方法を援用し、奥日記の記述の中心である贈答行為や御機嫌伺いなどの儀礼・交際面に着目し、奥向の政治文化構造をあきらかにする。

また、申請者がこれまで行ってきた「御家」の継承意識や存続戦略に関する研究において、奥向が果たした役割をあきらかにする。

大名・藩研究との接合

奥向を女性が閉ざされた空間として女性史やジェンダー論の枠組みに閉じ込めるのではなく、表向と相互補充関係にある政治機構として位置づけ、大名・藩研究との接合を図る。

本研究の計画



### 3. 研究の方法

本研究では、尚古集成館所蔵の島津家奥日記を分析対象の中心に据える。同史料は江戸時代のものに限っても146冊現存する。これらの史料は、すでに『東京大学史料編纂所報』(第7号、1973年)で紹介されているにもかかわらず、その量の膨大さゆえにこれまで研究者に活用されてこなかったのである。

そこで、ある特定の日記を通時的にすべて翻刻・分析するという方法ではなく、同時代の、異なる人物の手元で作成された複数の奥日記を用いて、奥向構造を複眼的に把握する方法を採ることとする。

特に人物構成・職制・人物交流の範囲などを比較しながら全体像を把握・復元する。

以下の分析年代はまとまった日記がある時期となっている。

2013年度の分析対象(11冊)

- ・文久4年(1864):  
「鳶印(島津齊興側室お由羅)日記」1冊、  
「弓印(島津齊彬3女・島津忠義正室暲姫)日記」1冊、「楨印(齊彬5女・島津忠義継室寧姫)日記」2冊
- ・慶応2年(1866):  
「鳶印日記」1冊、「表方右筆間日記」1冊、  
「弓印日記」1冊、「楨印日記」4冊

御日記	文久四年甲子/年正月	弓印御祐筆間	1	ゆみ印御日記	慶応二年丙寅/年正月	御右筆方	1
				御正月帳	慶応二年寅/正月吉日	万亀印	1
御日記帳	文久四年子/正月吉日	楨印	1	御日記帳	慶応二年寅/四月吉日	楨印	1
御日記帳	文久四年子/四月吉日	楨印	1	御日記帳	慶応二年寅/七月吉日	楨印	1
				御日記帳	慶応二年寅/十一月吉日	楨印	1
御日記	文久四年子正月より	鳶印諸所	1	御日記	慶応二年寅四月より	鳶印諸所	1
				日記	慶応二年正月吉日	表方祐筆間	1

2014年度の分析対象(11冊)

- ・安政4年(1857):  
「磯湯茶屋御滞在日記」1冊、「表方祐筆間日記」1冊、「哲丸様(島津齊彬6男)日記」1冊、「典姫様(齊彬4女、島津珍彦室)日記」1冊、「楨印日記」1冊
- ・安政5年:  
「指宿二月田御茶屋日記」1冊、「表方祐筆

磯湯茶屋御滞在日記	安政四年巳/五月十五日より		1	指宿二月田御茶屋日記	安政五年辛酉	御右筆間	1
日記	安政四年巳/正月吉日	表方祐筆間	1	日記	安政五年辛酉正月	表方祐筆間	1
奥日記	安政四年巳/九月吉日	獅子印御右筆間	1	奥日記	安政五年辛酉正月	獅子印御右筆間	1
奥日記	安政四年巳/正月吉日	万喜印御右筆間	1	奥日記	安政五年辛酉正月	万喜印御右筆間	1
御日記	安政四年巳/正月吉日	万喜印御方	1	御日記	安政五年辛酉正月	楨印	1
				御日記		楨印	1

間日記」1冊、「哲丸様日記」1冊、「典姫様日記」1冊、「楨印日記」2冊

2015年度の分析対象(16冊)

- ・文久2年(1862):  
「弓印道中日記」1冊、「典姫様日記」1冊、「楨印日記」4冊、「玉里詰所日記」1冊、「詰所日記」1冊
- ・文久3年:  
「表方祐筆間日記」1冊、「弓印日記」1冊、「楨印日記」4冊、「玉里詰所日記」1冊、「詰所日記」1冊

日記	文久二成正月元日		1				
	定免・典姫御日記別段						
	二候得共当年方表方御帳						
	めん二御一所二増成り候事						
日記	文久三年正月元日	表方祐筆間	1				
弓印御道中日記	文久二年戌/十月廿九日		1	弓印御日記	文久三年亥/年正月廿三日より	御祐筆間	1
御日記	文久二年戌/正月吉日	楨印	1	御日記	文久三年亥正月吉日	楨印	1
御日記	文久二年戌四月廿三日	楨印	1	御日記	文久三年亥四月吉日	楨印	1
御道中御日記	文久二年戌/正月吉日	楨印	1	御日記	文久三年亥正月吉日	楨印	1
御道中御日記帳	文久二年戌十月廿九日	楨印	1	御日記	文久三年亥十月吉日	楨印	1
御日記	文久二成正月より	玉里詰所	1	御日記	文久三年正月ヨリ	玉里詰所	1
御日記	文久二成正月元日	詰所	1	日記	文久三年亥/正月元日	詰所	1



#### 4. 研究成果

本研究では、異なる人物の手元で作成された複数の奥日記の分析による奥向構造の全体像を把握・復元する基礎的な研究を行い、その構造を、同時期の藩内および藩外（対他藩、対幕府、対朝廷、対外国など）の政治・社会的状況を踏まえて位置づける応用研究へと発展させることを目指した。

まず、史料所蔵機関である尚古集成館において奥日記38冊（8, 247コマ）の撮影を実施した。

奥日記の記述の中心である贈答行為や御機嫌伺いなどの儀礼・交際面に着目してみると、その交際の範囲が広く、人物を特定していくことすら困難な状況にあった。

薩摩藩における上級家臣（124家）を特定するには、『薩陽武鑑』（尚古集成館、1996年）が最も便利であり、島津家内部の人物を特定するには、『島津氏正統系図』（島津家資料刊行会、1985年）が最も便利である。ところが、上記の資料ではすべての人物を比定することができず、改めて人物構成・職制・人物交流の範囲などを確定するための人物比定や用語集などの基礎データを集め、確定していく作業を行った（下図。一部抜粋）。

宰相・金剛定院	斉興
太守	斉彬
若殿	虎寿丸
典姫	斉彬女
松寿院	種子島久道室・斉宣女
兼水	忠公・重富家隠居・斉宣男
安芸	忠剛・今和泉家・斉宣男
周防	久光・重富家・斉興男
弾正	種子島久珍・斉宣男
兵庫	久長・加治木家
讃岐	貴典・垂水家
石見	島津久淳
すま	斉彬側室
筑後	川上久封
誠忍院	斉宣側室
大中	島津貴久
豊後	島津久賢
常興普院	郁姫・斉宣女・近衛忠熙室
随真院	斉宣女・佐土原藩主島津忠徹室
多門	喜入久道
寶鏡院	斉宣側室・斉興生母
対馬	忠喬・今和泉家隠居
伊織	榊山久成
又四郎	貴敦・垂水家嫡子
真如院	斉宣側室
於朝	南部信順女・重豪孫・島津貴教室
大信院	重豪
柔正院	重豪女・桑名藩主松平定和室
大慈院	斉宣
ちか姫・千賀姫	重豪女・大垣藩主戸田氏正室
本光院	久肥・重豪男
觀光院	菊三郎・斉彬男
又次郎	島津忠義・久光男
お定	久光女
お哲	久光女
お寛	久光女
敬四郎・備後	島津珍彦・久光男
英之進	島津忠敏・久光男
造酒	久敬・忠剛男
悦之助	島津久封・久光男
おなる	久光女
おすか	島津忠喬女
おたつ	島津忠剛女
おさい	島津忠剛女
おいわ	島津忠冬女
萬吉	島津卿静・忠喬男
尚五郎	島津卿隆・忠喬男
図書	島津久治・宮之城家・久光男
お初	種子島久珍女
静洞	島津忠實・重富家
紫雲院	斉興女・順姫
嶺泉院	島津斉敏室・池田斉政女

この作業に、当初の計画より多くの時間と労力を費やすことになったが、今後の作業を進めるさいの基礎データや見取り図となるため時間をかけて丁寧なものを作成した（研究成果）。これについては、幕末の薩摩藩を研究するうえで基礎データとなるものなので、大学の研究紀要に掲載し、利用に供する予定である。

この交際範囲の広さは、第8代藩主島津重豪以来の婚姻政策に起因するものであり、今後、この時期の奥日記との突き合わせを行っていきたく考えている。

薩摩藩にとって、安政4, 5年という時期は、第11代藩主島津斉彬が一橋慶喜と初対面を実現したり、集成館事業を完成させたりと藩内外で活躍するが、その斉彬が安政5年7月に急逝し、その跡を茂久（忠義）が継ぐという「御家」存続の危機に直面した時期でもあった。

また、文久2, 3年という時期は、薩摩藩の尊王派などを鎮撫した寺田屋事件、島津久光の行列に乱入した騎馬のイギリス人を供回りの藩士が殺傷した生麦事件、そのもつれから起こった薩英戦争など、藩内外のみならず、外国との関係においても「御家」存続の危機に直面した時期であった。

さらに、文久4年、慶応2年という時期は、藩主・島津忠義の実父にして斉彬の異母弟にあたり、「国父」・「副城公」と呼ばれた久光が実権を握り、公武合体派として雄藩連合構想の実現に向かって活動するが、薩英戦争を経て西郷隆盛ら倒幕派の下級武士へ藩の主導権が移る時期である。その後、幕末には公武合体論や尊王攘夷を主張し、長州藩と薩長同盟を結んで明治維新の原動力となることとなる。

特にこの時期の日記でおもしろいのは、「蔦印日記」2冊である。なぜなら、第10代藩主島津斉興の後継者として側室の子・島津久光を藩主にしようとする一派と嫡子・島津斉彬の藩主襲封を願う家臣の対立によって起こされた、いわゆる「お由羅騒動」の当事者であるお由羅の最晩年の様子をうかがうことができる史料だからである。お由羅は、この騒動の首謀者として「姦女」とか、「悪女」とかというイメージが創られていた。ところが、この史料を紐解くと、お由羅は騒動後も処罰されることなく、慶応2年に71歳で亡くなるまで鹿児島城下で過ごし、その間も松寿院など前掲表にみられる人物と贈答関係・儀礼関係を結んでいたことが知られる。したがって、従来のイメージに再考を促すことが可能となる。

これらの日記は当事者周辺における日常の贈答関係や儀礼関係の記述が大半を占めていることがわかった。それゆえに、研究素材として十分に取り上げられることがなかったことが容易に想像される。ところが、38冊の奥日記の分析を通して、藩の家老である小松帯刀の書状や大久保利通の書状など、

当時の藩政を動かしていた家臣たちの書状や表向の動向をうかがうことができる史料が数多く書写されていることがわかった。それは、これまで指摘されてきたような、奥向は表向と無関係に存立しているという構図を塗り替えるものであると指摘できる。

現在の藩研究の動向では、「藩」や「藩政」を主語にして、一括りにして論ずることができなくなっており、政策を決定する主体がなにであり、その主体ごとに腑分けして意識や思想の違いを抽出することが求められる研究段階になっている（佐藤宏之「物言う大名 松代藩第九代藩主真田幸教」『歴史評論』第754号、2013年、佐藤宏之「第九代藩主真田幸教の「家」戦略」『松代』第27号、2014年）。

本研究は、こうした研究動向に、奥向の視点を付け加えるものといえる（研究成果）。

これまでの薩摩藩の研究は、島津義弘にはじまり、島津斉彬・島津久光・西郷隆盛・大久保利通・小松帯刀といった有名な人物を中心に描かれてきた。したがって、彼らの事蹟ばかりが目立され、彼らが存立した基盤やそれを生み出すことになる背景を論じることがほとんどなかった。いわば、薩摩藩の、島津家の「栄光の歴史」を論じているだけに過ぎないといえよう。こうした人物の伝記をいくらか並べたところで、歴史の流れの全体にはならない。また、歴史の動因が歴史上の人物の個性や行動にのみ求められ、個人的な実力や野望だけが重視され、それを側面から支えていた社会的あるいは政治的な情勢などが全く無視されてしまうことになりかねない。その問題点を、薩摩藩の奥向の観点から指摘し、複眼的な視点より新たな歴史叙述をする必要性を指摘した（時代考証学会総会における口頭発表。2015年3月20日）（研究成果）。この視点より、『島津家の歴史を問う（仮）』を中央公論新社から2016年度内に刊行すべく、現在執筆中である（研究成果）。

以上の研究成果は、これまでの薩摩藩に関する歴史叙述に一定の修正を迫るものといえる。すなわち、これまで全く用いられてこなかった史料の掘り起こしによって、新たな歴史叙述が可能となったからである。先行研究としてあげられる、畑尚子氏や松崎瑠美氏の研究では用いられていない奥日記を使い、その研究を批判的に乗り越えていきたいと考えている。

本研究期間では、主に史料の解読・分析に時間を要し、論文のかたちで公表することができなかった。

この一年で成果を公表することを約束する。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 1 件)

佐藤宏之、『島津家の歴史を問う（仮）』、中央公論新社にて2016年度内に刊行予定であり、現在執筆中である。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

佐藤 宏之 (SATO, Hiroyuki)

鹿児島大学・法文教育学域教育学系・准教授

研究者番号：50599339